

## 生き生きとした市民と自治体を育てる都市づくり

法政大学教授・都市政策

田村 明

### 一、二十一世紀は都市の時代

激動の時代であった二十世紀もあと十年ほどで終わろうとしている。来たるべき二十一世紀は、一言でいえば「都市の時代」である。これに対して、我々の過ごしてきた二十世紀は、ライフスタイルや価値観を激変させ、「農村の時代」から決定的に「都市の時代」へ変換してゆく過程の中間点として、「都市化の時代」と言うべきものであった。

すでに人類は数千年前から都市をつくり、そこに文明を育ててきた。都市を「City」と文明を「Civilization」とは同根の言葉である。人類は文明とともに都市を作り、都市を育ててきた。しかし、「都市の時代」の都市になると、これまで我々が知っている従来の都市とは、共通性をそなえながらも決定的に違う次元のものになるだろう。そうした変革は、すでに二十世紀の「都市化の時代」に始まっている。

産業革命以来、人口は急速に膨張し、増加した人口の多く

は都市を目指して集中する。その後も産業構造はさらに高度化を続け、製造業から第三次あるいは第四次産業と呼ばれるような都市型構造に急速に変化している。自給自足を原則にしていた農村型の生活から抜け出して、現在の都市生活は、人々は金さえあれば自分の手によらずに安価で大量な工業製品の恩恵を受け、多くの物を手に入れることができる。先進国の都市生活は数多くの電化製品、車、情報機器を使用することにより著しく変化し、農村部の生活スタイルも、場合によってはそれ以上に都市型になってしまった。

多くのエネルギーを消費し、都市の夜があかあかと照らされていくのは、いまでは当然のことだが、電灯がごく一部で、まだランプを使っていた今世紀の始めには想像もつかない事実である。科学技術の急速な進歩と社会の変化によって、都市間が超高速の鉄道や高速道路で結ばれ、国境を超えて巨大なジェット機が運航されている。今世紀の始め、人類が空を飛ぶのはまだ夢の世界で、気違い扱いされていたライト兄

弟の飛行機が見る人もなく地表スレスレにやっと離陸したのは、一九〇三年のことである。マルコーニが無線電信を発明したのは一八九五年だが、今日では衛星通信が地球の裏側の情報をリアルタイムで目に映し出してくれる。巨大なジャンボ機が空を飛び、超音速機は地球を縮めている。衛星通信は地球の裏側の情報までも同時に世界中の人々に映し出している。このような今日の姿は、ハイテク時代、国際化時代、高度情報化時代とも呼ばれているが、それら交通通信手段の進展の帰結として、ますます大都市への集中を強めている。いまでは当然の車社会の到来さえ、僅か三十年前でも現在の状況を予測した人はいない。

すでに今日では、一〇〇〇万人はおろか三〇〇〇万人を超える超巨大都市圏が出現しているが、このような都市は、それ以前の都市と同一に論ずるのは無理であろう。都市の時代は、人類の文明の成果として栄光をもって語られる一方、人々の手で制御できないほど膨張し、自らが運動する力をもった巨大なリヴァイアサンに比すべきものとしてとらえなくてはならない。

定量的にみると、今世紀の始めには一六億人程度であった世界人口はすでに五〇億人を超え、世紀末には六〇億人を超えるかという爆発的な増加を示している。一九〇〇年にはそのうちの都市人口は約二億二〇〇〇万人で、総人口のやっとな割を超える程度であった。何千年も前に都市が成立してか

ら今世紀の始めまで、早期に産業革命を達成したイギリスを除いて、都市人口が総人口の約一割程度以内にとどまっていた。それが、今日では都市人口は二〇億人を超え、先進諸国の都市人口の割合は七〇ないし九〇%にも達している。今後は第三世界で急速な都市化が進み、世界の都市人口が全体の五〇%を超える日も遠くはない。二十一世紀に入り、二、三十年もたてば、都市化率は先進国では九〇%、その他の発展途上国でも七〇%にも及んでいるだろう。

都市化率だけではない。すでにみたとおり、今世紀の始めから九十年もたたないうちに、都市人口は一八億人程度増加したが、これは実に十倍という成長である。量的にみるだけでも、都市は激変せざるをえないように、科学技術の進展は生活の質も全く変えている。

都市はそれ自体が膨張してゆく生き物のような力をそなえ、簡単には制御できないほど巨大になり、大きな影響力をもつものに変質を上げてきた。都市はもはや農村の対立物という既成概念では処理できない。農村はもちろん、自然の山や水辺さえも都市の一部になっている。都市というところさえも従来の枠では律しきれなくなってきたし、今日の都市は質量ともに今までとは異質な次元に変化してしまった。

ここでいう都市とは、東京、大阪のような巨大都市圏に限られ、それ以外の都市のことではないという反論があるかもしれない。だが超巨大都市以外でも、今日のように交通、通

信手段が発展すると、かつてのように自立性を守ることが難しくなり、超巨大都市圏とのかかわりのなかでその存立が影響され、広い意味では巨大都市圏の一部になってしまっている。日本列島全体が一つの都市国家になったとみることもできらう。

このような巨大化した都市を嫌い、自然や農村に住むべきだという説を述べ、北海道の僻地などで生活している極く少数の人々もいるが、それらの人々のほとんどは、最も都市的なマスコミのなかで生きる、つまりすでに大都市情報圏の一部に取り込まれた自然のなかで暮らしている。今日のリゾート開発ブームも、都市人の外延的な生活の場として考えられており、自然のなかに都市を持ち込むことになるだろう。「都市の時代」に入った人類にとって、都市はもはやそこから逃れることのできない存在であり、どこに住もうとも否応なしに都市に巻き込まれ、都市とかかわり、都市的なライフスタイルを強制されることになるだろう。

我々の迎える「都市の時代」の都市の全貌はまだ分からない。我々はいま、知ることの出来ない未知の世界への入口に立っている。これまですべての面で、先進国の後をついてゆく立場にあったわが国は、都市化の時代に対処する手法については、まだまだ先進諸国に劣るべき点が多いにもかかわらず、いつのまにか世界に類例のないスピードで、ある面では世界最先端の都市化を上げてしまった。そうなると、「都市

の時代」という不可知の世界に適切に対応してゆくには、他人の真似ではなく、自らが英知を発揮してゆくほかはなくなつてきている。

## 二、都市化時代のわが国の都市の問題点

すでに激動の都市化時代を経てきた我々は、そこに多くの問題点や反省点をみつけることができる。来たるべき「都市の時代」の全貌は分からなくても、まずこれらの問題点を整理しておくことにより、未来の問題を予め学び、その対応を考えるべきだろう。

第一の問題は、都市化があまりにも急速であったために、機能主義、効率主義とモノづくりが優先し、人間性を失ってしまったことである。都市化は人間の都市集中によって生ずる。つまり、多くの人間が都市に住むことであるが、産業革命期には、逆に環境汚染や粗悪な住宅が密集し、都市を人の住めない環境にしてしまった。その反省から今日では都市にアメニティが求められている。人の住めない都市、人の心や感性を失った都市は、もはや都市ではない。わが国の異常な狂乱地価は、企業は立地できても人が住めない状況にした。土地問題の解決も都市に人間らしく住むための基礎条件づくりにある。

第二は、すべての都市が画一化してしまったことである。もちろん、先にも述べたように、現代では交通情報手段が発

展し、孤立的に自主性を主張することはむしろかしくなっている。都市化の時代は、都市の個性を奪ってしまったが、これからの都市の時代に、都市を生き生きとした人間の住む場にするためには、もう一度、都市の個性を回復しなくてはならない。生き生きとした人々の活動があれば、個性的な都市が多数生まれるはずである。逆にいえば、わが国の都市の個性が失われたのは、それぞれの都市の自発的な活動が失われてきたことを意味する。ようやく最近になって、都市の個性が求められているのは、その反省と次の時代への胎動とみるべきであろう。

第三は、あまりにも無制限に超巨大都市を成立させてしまったことである。先進都市では巨大化を防ぐためにさまざまな政策を試みてきたが、わが国の首都圏は、形式的な地方分散が叫ばれながらほとんど野放しで、東京への一点集中を強め、国土のバランスを著しく崩している。一九八七年に策定された四全総では「多極分散」によりその是正の必要性をうたってはいるが、実現の具体的な方策が的確に示されているとはいえない。

第四は、人間の活動が地球の生態系を脅かしていることである。人間活動があまりにも大規模化し、しかも効率性を求めた結果、地球資源を枯渇させ、地球環境を汚染または破壊している。今日では熱帯林の乱伐やオゾン層の破壊、酸性雨などが大きな問題になっている。昔の日本の都市はし尿にし

ても農村還元を行って、都市と農村とはうまく生態的に循環する環境を成り立たせていた。近代科学の発展はその循環を崩してしまった。都市文明はもとも生態系に人工的な環境を割り込ませたものである。それが小規模で極く一部であった場合には、自然の生態系に大きな影響を与えずに、なんとか収まっていた。しかし今日のような都市化の時代になるとそうはゆかない。都市に関係する多くの主体の行動を恣意に任せるのではなく、都市環境を自然のなかに極力調和させながら、地球の自然がうまく循環してゆける政策が実行されなくてはならない。

第五は、都市の住民が自立性を失ってしまったことである。市民の共同環境として、上水下水を始めさまざまな便益施設を具えている。それなくして、都市市民は一人で生活できない。意識しようとしまいと、これらの共同環境が都市生活を維持している。その一方、都市は住民を農村的共同体の束縛から開放し、自由な存在にさせた。都市では実際には一人で生きていけるわけがないのだが、たった一人で孤立していても、それなりに生活できるようにみえるため、共同意識が希薄になってきた。それは、市民を無責任で自立性のないものにしてしまっただろう。今後の都市の時代には、個人の自立的な個性と自由度をのびしながら、新たな共同意識をもった市民を育ててゆくことが望まれる。

第六は、都市を市民の共同の環境として整備し、制御でき

る総合的な機能を具えた自治体を欠いていることである。都市が本當に個性的な人間的環境として成立するためには、住民が共同して自らの環境を作り育ててゆく共同組織をもつことが必要である。わが国の都市はこれまで、国の省庁の施策を実行する出先機関のような位置づけで、市民の信託を受けて、自ら政策を建て、これを実行する力をもっていなかった。これまで、充分な自治意識にもとづく自立性が育っていなかったが、総合性と主体性をもつ自治体の成立が、都市の時代に対応するには不可欠な条件になる。

### 三、都市の本質的な矛盾とその解決手段としての都市政策の必要性

右にあげたような問題点は、一つにはわが国が昔は富国強兵、戦後は産業優先に走り、適切な都市政策を欠いていたため結果だが、他方、都市文明のもつ本質的な矛盾にもよる。都市は人類に便益を与え、文明を生み出すものであるが、同時に多くの問題点を発生させるといふ矛盾をもちあはれている。それは都市文明のもつ本質的な矛盾であろう。二十一世紀の都市は、ますますその矛盾を強めることになるだろう。たとえば、各都市で叫ばれている情報化、国際化は、政策というよりも都市の時代の必然的な流れだが、それは都市に便益や魅力を増す一方で、新たな問題の発生も意味している。今日の我々は都市生活から逃れることができないのだから、この

都市の矛盾を克服し、制御するための政策とその実行能力をもたなくてはならない。

都市の本質の第一は開放性である。都市という文字の「市」とは交流、交易の場を意味する。その中であって、情報は交流し、国際化も遂げるだろう。ただし、均一の情報のもとで他都市の模倣も多く、ともすれば画一化し、個性を失いやすい。マンネリ的な地方博の流行もその一つの例である。また、交流の結果、より大きい都市が小さい都市、情報の少ない都市を吸収してゆくことになりやすい。今日のような東京への一点集中は、都市の本質によるが、それに科学技術の発達による交通通信手段の整備が行われて一層加速された。この傾向のままに放置しておけば、都市は巨大なモンスターとして、絶えず膨張と拡大をつづける本質を持っているので、「都市の時代」にはさらに超巨大都市に集中し、その結果、地方の資源や活力を枯渇させ、都市を画一化させてしまうおそれがある。それを防ぐには、都市に開放性をもたせながらも、過大化を抑制する制御を行い、同時に小都市も自主性をそなえ、個性的な情報を発信する機能を育ててはならない。

都市の第二の本質としては、絶えず異質で多様な人や機能、情報が共存し、互いに刺激となり、新しい知恵や情報を創造できることである。同質の人々だけの集団は閉鎖的なムラであり、マンネリ化した秩序による居心地のよさはあっても、新しいエネルギーを生み出す力とはなりにくい。この異質な

共存性は都市の本性だが、他方では、立場の異なる人々の対立抗争を生むことにもなる。アメリカの都市は人種問題という深刻な矛盾対立をかかえながら、それを克服する努力が続けられ、都市に常に生き生きとしたエネルギーを生み出してきた。わが国の都市は、この点、比較的波風が少なく過ごしてきたが、これからはそうはゆかないだろう。都市は宿命的に多くの異質の要素を取り込むが、そこに生ずる矛盾をどう克服し、共存させてゆくかが大きな課題になる。

第三に、人々が他人に煩わされずに生活できるのは、都市の大きな利点であり特質だが、その反面、共同体の支援によらなければ個人では自立も自給自足もできないのが本質である。その共同体はふだんは見えにくいから、ほとんど意識しないですむ。それが、都市市民の自由度を保障しているのだが、そのために共同の市民意識をもちにくい。これが過度になれば共同体は維持できなくなり、崩壊するか、市民の共同の利益と離れた行動をするだろう。共同体が全体の利益のために道路や塵芥の焼却場を建設しようとする、対象地域の個人の利害と衝突する。全体の利益と個人の利益が衝突するのは都市生活の宿命である。この矛盾を解消するために、全体の利益をあまりにも強く主張すれば全体主義的になるし、逆にあまりにも個人の利益が強調されれば、共同体運営は崩壊し、結局は個人の生活を支える都市基盤が整備できず、都市生活は成り立たなくなってしまうだろう。こうした本質的

な矛盾を解決し、調和させるのは、人間の英知により、特定の個人に損失や利益を与え過ぎないで、共同の利益を確保できるようなルールを設定してゆくほかはない。

このように都市はそれ自体本質的な矛盾をもっており、「都市の時代」には、それがますます顕著になってくるだろう。こうした矛盾は二律背反的であり、「見えざる神の手」によって予定調和的に解決するほど樂觀的なものではない。その解決には、人々の努力と知恵によって、市民の生活を支え向上させる政策を立てて実行することが必要なのである。

これまでは、問題がおきてからやっとな対策を講じ、それもタテワリ個別の政策を行ってきたが、それでは都市の宿命的な矛盾を解決することができないどころか、矛盾を増大させかねない。都市をトータルに把握した未来性のある総合的な政策が必要なのである。

#### 四、未来の都市像の問題点

都市には大きくみればモノの面とヒトの面がある。未来の都市像について語られるのはふつうモノの面である。そこに夢のような科学技術都市を描くことはできる。月は勿論、火星や木星を訪れる定期便の発信する基地があり、都市は巨大なドームのなかで人工的に気象をコントロールされるというSF的なものから、もっと現実的になると、都心には一〇〇階建て以上のインテリジェント化した超高層ビルが林立し、

ジオフロントと呼ばれる一〇〇メートル以上の地下を高速交通機関がむすぶ。リニアモーターカーが東京、大阪を一時間で結び、超伝導技術も実用化され、クリーンで効率のよいエネルギーが使われる。衛星を利用した通信網は世界中に広がり、都市内にはCATVのネットワークが、鮮明で多数の選択可能なチャンネルを提供する。住居はすべてコンピュータでコントロールされ、小さな端末機さえあれば、ビジネスも家庭の機器の操作も自由自在だし、世界の人々と通信しあい、ホームショッピングもホームバンキングも普遍化してきている。このようなモノの面からみた未来都市の姿は度々描かれてきた。その大部分の物はすでに次々と実現されている。人間の欲望にはかぎりがなく、それを可能にする技術は確実に進歩し、やむことはなく、これを実現してゆく企業はモノを提供してゆくことに貪欲である。都市はさらに拡大し、便利で、高性能化したものになってゆくだろう。

だが重要なのは、さまざまなモノをつくりあげている技術や企業が進歩することで、先に述べた都市の時代の問題に答えられるかということである。モノをつくり便利になるだけでは、人が人間らしく生きてゆくための総合的なシステムとしての都市をつくる条件として不十分なのである。モノができてゆくほど、ヒトは進歩しない。都市に住むヒトの面のほうを重点に未来の都市を考えておかないと、モノがヒトを抑圧し、ヒトは逆に人間のつくったモノに制御されてしまうだ

ろう。「ロボット」という言葉を発明したカレル・チャペックはかつてそんな未来を描いた。文明の機器が人間をコントロールする権力のために使われるという暗い未来を描いたオーウェルの『一九八四年』も暗示的であった。

すでに、現代でもテレビが、家族の連帯感を失わせ、人を孤立化させることが指摘されているし、バイクやクルマが暴力となったり、犯罪を広域で深刻なものにさせた。機械文明や複雑な社会に対応できなくなりストレスに悩む人々は多い。人間の欲求は限りなく、それに応えて企業や社会が、人々に多くの満足を与えたことは事実だが、その反面ではヒトの生活をますます奪い、孤立化させ、都市生活に不可欠なはずの共同連帯性を失い、これまでになかった悩みや犯罪を増加させている。

このような都市文明や科学文明に批判的で、農村のなかにこそ真実があり、都市は軽佻浮薄だという説は昔はよく叫ばれた。しかし、それは農村を中心とした農村型社会での話で、今日のような「都市の時代」では、そうは言っても、いままら逃げるべき場所をもたない。どうしようもない議論である。今日の都市文明のなかに、自然や農山村を生かし、人間としてよりよく住める都市を作り上げる努力をするほかはない。

それには都市という複雑な仕組みをうまく運用するための都市政策が必要になるのである。都市をハードの機械としてではなく、都市という装置やシステムを動かすソフトを含めた

ものが都市政策である。

## 五、あるべき未来の都市像

それでは、二十一世紀の都市はいかに描くべきだろうか。当然のことながら、何よりもまず都市を人が人間らしく住めるものにするのである。「都市の時代」とは、都市がそれ以外に住むほかにない人間居住の最後のものであることを意味している。その都市がヒトの住めないものであったら、人間の作った都市が、逆に人類の存在自体を脅かすことになる。それなのに、このあまりにも当然の前提がしばしば忘れられ、後回しになったり、ときには踏みにじられてしまうことさえあった。個別の経済的な利益を優先させた乱開発によって、崖くずれが生じ人命を奪ったり、公害によって大気や水が汚染し、多くの人々を苦しめた。アメリカの都市ではドラッグが蔓延し犯罪を増加させた。都市を災害や犯罪から守られる安全なものにすることがまず必要である。

ヒトが住むためにはなんととっても住むに値する住宅が必要である。第二次大戦の敗戦国であるドイツやイタリアでは、戦後の復興の第一に住宅を建設したが、それに対してわが国では住宅を後回しにする政策をとった。住宅を作る前提である土地についても、適切な手をうたずに狂乱地価をまねいた。ヒトが都市に住むためには、まず始めに土地を個別の利害によって左右されたり、特定の人々の不勞所得とさせな

いたために、市民の共有の財産として適切に利用できるルールをもち、コントロールが行われるべきである。

土地さえ制御できるならば、現在の所得水準なら、二十一世紀には一戸の住宅の最低規模を一五〇平方メートル、平均二〇〇平方メートル以上にするのができるだろう。その結果、住宅からむさまたまな需要を喚起して、内需を拡大させるだろうし、失われている家庭同士の付き合いをホームパーティーなどで復活させ、市民の連帯感を回復するのにもつながる。もちろん、大都市に住むのは、庭つき一戸建というわけにはゆかない。一定の地区内には一戸建住宅はゆるされない。そのかわり、広い緑のあるバルコニーをもち、都市市民の共有財産としての公園緑地や、休日に市民が菜園を楽しめるクラインガルテンも都市の近辺に確保される。都市生活に必要な道路や駐車場、その他の公的施設をまず充分に確保し、それが確保されなければ住宅の戸数は認めるべきではない。

このようなゆったりとした人間のための住居と共同の住環境をととのえていないものは、都市ではない。どうしても一戸建を希望する人々は地方小都市か、かなり交通の不便な場所に甘んじなければならぬ。しかし、発達した情報通信網を使えば、職業によっては充分仕事もこなせるし、かなり規模の大きいサテライトオフィスを各所に配置することもできる。

人間らしく生きる都市では、機械や装置というモノとしての都市はあくまでもその手段であり、目的ではない。人間ら



しく生きるとは、それぞれ人間が一人の個人として尊重され、その個性をよりよく伸ばすことができ、生き生きと人生をすごせる都市である。そのためには、さまざまな個性の出会いと交流とが必要であろう。都市には多様な異質の人々の集まるさまざまなフォーラムがほしい。フォーラムは学術、文化、芸術、あそび、スポーツ、地域生活、教育など、無目的なまでの、ムラではない多様な開かれた場所であり、異質の人々をつなげる媒介である。それが、新しい公共となるだろう。公共とは、上から押しつけてきたものではなく、市民の自発的なつながりによって育てられるものである。都市は人間の創造力を高めるものでなくてはならない。創造とは精神的な創造を包含する。

人間らしく生きる都市とは、もちろんアメニティのある都市である。量や大ききで測れない質にかかわるものであり、人の心を慰め、安らぎと楽しさを与えるものである。都市を市民の共有財産として魅力ある楽しく美しいものにするためのアーバンデザインの手法も当然取り入れられなくてはならない。市民が共同して工夫し、継続して街を魅力的にすることで、市民が連帯感を持ち、都市を個性的なものにしていくことができる。

そういう都市はモノだけでなく、他人への優しさや温かいココロがある人々の住む都市である。人のココロを失ったモノの都市は、それがどんなに進歩しているように見えても、

決して人々を幸せにすることはできない。人に対する温かいココロは、都市に対する愛情につながり、自然にも畏敬と親しみを持つものになろう。

また、そのような美しく個性があり、人間的な魅力ある都市こそが、住んでいる人々の生活を充足させることはもちろん、すぐれた人々を集め、人々の創造的な環境として知恵を刺激し、これからの産業や芸術を育ててゆくだろう。

第二には、そのような都市をつくるには、無制限な東京集中や大都市集中を制御しなくてはならない。大都市は他の都市を吸収しながら自己増殖する性質をもつ。それを制御するには、各都市の自立性を保たせ、大都市を抑制する強硬な政策をとらなければならない。その手段として遷都が論ぜられるが、それよりもまず強く強くなりすぎた東京の首都機能を極力軽くすることである。先進諸国では市民自治を重んじ、連邦制をとっている国も多い。不必要な中央の権限はできるだけ減らし、より市民に近いところへ権力を分散すべきだろう。それが、一点集中を是正し、個性ある都市を育てることになる。

現在のように中央集権が強すぎ、自治体に決定権がなく、中央への陳情行政に頼っているようでは、市民は責任を感じず依存的で、都市は画一的なものになり、財政の資金も、本来に地域の実情にあった効率的なものとはならない。それでは市民はいつまでも自分たちの住む都市共同体の存在を自覚

できず、依存的、孤立的、無責任のままであろう。都市の自治を伸ばしてこそ、限られた条件のなかで、市民は都市の矛盾を克服する方法を求め、人間的な環境をどう作るか、なにを優先的に行うかを真剣に考え、見えない共同体を目に見えるものにするために努力するようになるだろう。

第三には、地球環境全体を生態的に適切な循環システムにのせる配慮が必要である。都市という人間のつくった人工システムも、やはり自然のシステムの一部として共存できるようにしなければならぬ。都市活動にどうしても必要なエネルギーや、活動の結果排出される廃棄物はともすれば自然の循環システムを壊し、汚染しやすいものだが、これからの科学技術の重点はエコシステムを維持してゆく観点を重視しなければならぬ。都市の時代には、ますます原自然の価値が増加する。人工的な利便性を高めるだけでなく、自然を保持するために、土地問題などの社会システムを含めた技術体系が必要になるだろう。

## 六、未来の都市をつくってゆく条件

二十一世紀は時間が経過すれば当然に訪れるので、その言葉自体に特に新しい夢があるわけではない。これまでのように、皆がバラバラに行動し、方向性もなく漫然と個々の施策を重ねても二十一世紀はやってくる。それでもSF的な未来都市はかなり現実のものとなるだろうが、それでは人間

の住むに値する都市にはならない。

「市の時代」のあるべき都市をつくってゆくには、都市の市民が共同して自治体を自らの政府とし、そこで未来を見据えたフューロフイーに基づく都市像をもち、自主的な都市政策を立て、実行してゆくほかはない。自治体はこれまでのような定型的な国行政の執行機関ではなく、実態を知りながら現実に流されず、自らの政策を立て、生きた都市に実行できる総合的なシクミであるはずである。

二十一世紀はいまよりもはるかに国際化し、国家という枠を超えてより大きな国際社会の中で動いているだろう。EC統合はヨーロッパの古い国家の枠を超えた。二十一世紀には、我々が当然の前提としていた国家という境界はいまよりもずっと低いハードルになっている。そうした国際化がすすむほど、いや国際化すればするほど、人々の生活を支える基礎単位をしっかりと保持してゆくことが重要になるだろう。その生活の基礎単位に当たるものが都市自治体である。国際化した世界と個人では距離があり過ぎる。放浪的な国際人は一部の例外で、多くの人々にとっては、自分の生活の基礎としての家庭と、それを支える基礎単位としての都市をもたなくては、生活は守れない。

都市自治体が、必要な施策をたて適切な手段を実行できるには、第一には自立性もちながら、都市という新しい共同体に生活し、これを作る市民の存在がその前提である。市民

はムラのような集団制約の枠にはまりもせず、かといって共同体によって支えられていることを忘れてたり無視する利己主義にも陥らない、自由で自立した個人で、自治体はその繋がりによって生まれる。こうした市民が責任をもって、自らも参画して都市を作り、運営を見守っていることである。

第二には、自治体行政が自主的な政策立案と経営能力をもつことである。自治体は、総合的に自治体の運営を可能にする人とシステムとリーダーシップが必要であり、自治体にはそういう組織と都市の時代に必要な新たな資質を具えた人材を育てなくてはならない。二十一世紀の都市の時代が安定するまでには、さまざまな変動は避けられない。都市は巨大な生き物であるが、これをどういう情勢になろうともその時に応じて制御出来る弾力性あるシステムにしておかなくてはならない。

都市の時代に、生き生きとした個人の活動を保障し支えるためにも、市民の共同体として自治体は機能しなければならぬのである。

そうした生き生きとした市民と自治体が二十一世紀に個性ある都市文化を育てる。自分たちの手で自ら文化を築いてきた市民は、都市に誇りと愛着をもつことができるだろう。そういう文化的で自立性ある都市が多数生まれることが、未来の国土を真に豊かなものとするだろう。

## 公 告

昭和六十三年度剰余金の割りもどしは、総代会において次のとおり議決されましたので公告します。

一、割りもどし金は、平成元年三月三十一日現在の組合員に対して契約口数に応じて割りもどされ、個人別に出資金に振り替えます。

二、割りもどし金の額

(1) 火災共済

共済契約一口当たりの割りもどし金

木造九〇円、耐火造六〇円

(2) 自動車共済

割りもどしはありません。

平成元年五月二十六日

生活協同組合 全国都市職員災害共済会

会長 吉野 和男